

訳者あとがき

本書はハンガリー語原書にもとづく邦訳書であり、原書の本文すべてを訳出したものである。しかし、原書の巻末に一括して掲載されている 122 枚の写真集は、本訳書に収めることができなかつた。そのうちの何葉かを本文の該当箇所に挿入したが、いくつかの理由で写真集としてのまとまった掲載を断念した。割愛された巻末写真集は、訳者のホームページ (<http://morita.tateyama.hu>) で一覧することができる。関心のある読者は参照されたい。写真集の割愛を補完する意味で、原書にない事項・人名索引を付した。

本書の著者コルナイその人やその業績について、訳者が付け加えることは何もない。本書にそのすべてが記されている。また、本書がどのような読者を対象としているかも、「著者前書き」から明瞭である。それゆえ、著者には日本語版への序文を求めなかつた。

読者の便宜のために、一つだけ情報を提供しておきたい。訳者は 1990 年初頭にボストン・ケンブリッジのコルナイ宅にて、著者と長時間にわたるインタビューを行い、生い立ちから現在にいたる人生と著作を語ってもらった。この記録は、『経済評論』（1990 年 10 月号、11 月号、12 月号）に収められている。コルナイ経済学に不案内な読者は、まずこの記録に眼を通されたい。事前の予備知識として、本書を読み進める指針になると考える。残念なことに、その後『経済評論』は廃刊になってしまったが、このインタビュー記録は私のホームページからダウンロードできる。もっとも、余計な予備知識がない方が良いかもしれない。ただ、著者が自らの著作の検討を行っている諸章を読み通すには、ある程度の予備知識がないと難しい。その手引きになるはずである。

自然科学の学問と同様に、経済学分野もその領域が限りなく分割され、相互理解が非常に難しくなっている。とくに、戦後の数理経済学の興隆によって、数学的手法を使う研究者と、従来の散文的記述を主とする研究者との距離は埋めようもないほど広がっている。それはなりよりも研究対象そのものの乖離として現れている。現代の数理経済学は応用数学そのものであり、部分定理を仮説として定立し、それをコンパクトに証明する論文が優れた業績とみなされる。ここでは経済問題は論理証明を与える一つの事例材料にすぎず、目的と方法が逆転している。今日、主流派経済学理論の分野で職を得ようとするれば、数学専攻出身の方がはるかに有利な位置を占めている。数理経済学は初期の経済学的内容を失い、完全に応用数学の一分野に変貌してしまった。

こうした経済学理論の世界における変化は理論対象の限らない抽象化をもたらし、その結果として理論を現実総体の分析から遠ざけることになった。経済理論家は現実経済の諸事象を分析し、政策を提起する専門家ではなく、部分的な経済問題を事例とする行動の形式論理学や数理論理学の専門家、あるいはそれを数学的定理として解く応用数学の専門家になった。そのような研究から有効な国民経済分析を期待するのは難しい。とすれば、そのような研究が「経済学」として存在する意義はどこにあるのか。一般均衡理論をめぐる

コルナイの議論は、この問い答えようとしたものだ。

他方、エスタブリッシュメントされた学問分野では、理論の抽象化から学術的な退廃が起きることは良く知られている。経済学の応用数学化は数理経済学がエスタブリッシュメントされたことの帰結であるが、その結果、数理経済学は経済学としてのレーゾンデートルを失うという矛盾に直面している。

このような経済学の現代数理科学化への道を開いたのは、ハンガリー人数学者ノイマンに他ならない。ノイマンは常々、経済学者が現代数学に無知であることを鋭く批判していた。1940年代に経済学を学び始めた現代数理経済学の泰斗たちは皆、ノイマンの厳しい批判の洗礼を受けた。その先達者たちが、ノイマンと同じくハンガリー人であるコルナイ・リプタークによる「二水準計画化」の数学モデルに注目した。本書の記述の中に、クープマンズとハーヴィッツがケンブリッジの会議開催中にコルナイの部屋を訪ねる場面がある。彼らの著作にノイマンの影を感じたのだろう。しかし、ノイマンとコルナイは多くの点で対照的である。

ノイマンはあらゆるものを数理モデル化しようとした数学者だった。一の事を聞けば即座に十のことを展開できる頭脳の持ち主であり、物理学から経済学にいたるまで、その知的関心は多岐にわたった。20世紀を代表する天才である。他方、コルナイは数理経済学者として国際的にデビューしたが、ノイマンと違って数学者ではなく、数理モデル化より生きた社会・経済そのものの分析に関心をもっていた。ノイマンが天才だとすれば、コルナイは他を寄せ付けないほどの勉強家であり、現実観察にもとづく粘り強い分析家である。また、ノイマンが他を圧倒する即興的なモデル展開を得意としたのにたいし、コルナイは十のことを聞いても即座にそれを判断せず、何度も再考する時間を経て、著作によって思考を展開する。さらに、ノイマンは理論から政策まで、基礎研究から原子力政策のような現実の政治に至るまで八面六臂の活躍した希有な天才であるが、コルナイは政治を含めた社会的活動から身を退き、禁欲的に自らの課題を現実分析に限定した学者である。ノイマンが才気煥発的な能力で人を動かしたとすれば、コルナイは現実に深く沈潜した視角と鋭い分析力で時代を動かす理論を構築したと言える。

これほど対照的な二人であるが、一つだけ共通するものがある。ノイマンが一般均衡解の存在証明のために構築した数理経済モデルは、国民経済の再生産や成長の条件を分析したものと見ることができる。その意味で、国民経済の全体メカニズムを解明しようとする古典派経済学の神髄を備えている。ところが、ノイマン以後の数理経済学は矮小化された部分的事例の研究に墮し、古典派経済学と限りなく乖離する道を辿っている。こうした戦後の数理経済学世界の中で、コルナイの存在は一筋の光明であった。広い意味における数理経済学の専門家の中で、もっとも古典派的な経済学者であったと言えるだろう。現実の個別事象を観察し、そこから因果関係を探って、社会経済の全体メカニズムを分析する道筋を獲得して、全体理論を構築していく。社会学者が目指すべき一つの模範を示してい

る。経済学のみならず、社会科学を志す者が是非とも学びたい姿勢である。現実の観察と分析を欠いた理論は、所詮、頭脳の遊戯に過ぎない。

コルナイの著作はすべて、その時々において、大きなセンセーションを巻き起こしてきた。それぞれの著作の執筆の動機や経緯は、本書で詳しく扱われている。記者個人として一つだけ、特筆しておきたいことがある。それは主著の一つ『不足』（不足の経済学）が果たした現実的かつ歴史的役割である。この著作はハンガリーの国境を越えて社会主義圏の多数の経済学者や知識人に影響を及ぼしたが、なかでもとりわけ大きな影響を与えたのはロシアと中国である。この両国では改革派知識人に社会体制改革の理論的拠り所を与えた。社会経済体制の変革に思想的な確信を与えたとも言える。この著作が果たした役割は、歴史の中に特記されて然るべきものだろう。

この著作は大部かつ難解な書物であるが、旧社会主義圏の体制転換を担った経済学者や知識人は、この著作から一つのメッセージを引き出した。現存の体制が続く限り、「不足」からの脱却はない。体制の転換以外に方法がないという確信を与えた。一つの理論からイデオロギー的含意が引き出され、それが体制転換を担う知識人や活動家に知的確信を与えた。経済学理論の著作がイデオロギーに転化するという希有な現象が生じたのである。一つの経済社会理論が社会を動かす力に転化したのは、マルクスの『資本論』以来のことである。コルナイも記しているように、体制が崩壊するためには、体制を支えてきた知識人、官僚、党員が旧体制の継続性への信頼を失い、新たな体制構築への確信を得ることが不可欠である。コルナイ理論はその理論的な確信を与えた。理論は歴史を動かす力をもつ。経済学を志す人々には、是非、本書から理論と現実が切り結ぶ営為を学んで欲しい。

今、世界はひたすら前を向いて走っている。昨日起こったことですら、もう顧みられることがない。20世紀の歴史の半分を形成した社会主義について、もう誰も真剣に語る者がいなくなった。この健忘症にはひどいものがある。体制が崩壊したから研究する必要がなくなったのではない。まさに逆である。20世紀に生きてきた者は皆、歴史の証言者として、自らが見たもの経験したものを分析して、語り継がなければならない。人間社会が一夜にして変わることはない。体制が変わろうとも、そこには旧体制から継続するものや変容をうけたものが、新しいものと並存しながら存続している（拙著「体制転換にみるアンシャンレジームの継続と変容」、『経済志林』第67巻第3・4号、2000年3月を参照されたい）。古い社会の分析なしに、新しい社会の分析はできない。その意味でも、社会主義システムの分析と格闘し、それに生涯を捧げてきた著者の生き様を知ることが、社会の有り様と歴史の変化を学ぶ上で貴重な知識や教訓を与えてくれるだろう。

個人的な事柄を少しばかり記したい。記者がコルナイの存在を知ったのは、1970年代初めの大学院生時代である。1966年に国際キリスト教大学へ入学した記者は『資本論』を独学しながら、大学の授業では新古典派総合を唱えたサムエルソンの『経済学』（第六版）を

英語で読むという学部学生時代を過ごした。ちょうどこの頃に、『経済学』の都留重人訳が出版された。東大教養学部では内田忠夫教授がこれを使って講義され、玉野井義郎教授は上梓されたばかりの『マルクス経済学と近代経済学』を講義されていた。学部3年時には、当時スタンフォード大学助手だった雨宮健氏（現スタンフォード大学教授）から、アローードブリュー論文の解説講義を受けた。1960年代から1970年代にかけての世界は、未だ、戦後経済学の百家争鳴の時代であった。

当時、一橋大学杉本栄一門下の種瀬茂教授が、国際キリスト教大学で『資本論』の講義を担当されていた。その縁もあって、1970年に一橋大学院へ進学することになった。ちょうどこの時期に、二階堂副包教授が一橋大学に移動された。現代経済学のイデオロギー批判を展開されていた関恒義教授とは、戦後の一時期、東大の弥永昌吉ゼミでノイマン・モデルを学んだ間柄だった。数学出身の二階堂教授はノイマン・モデルから出発してアローードブリュー・モデルの別証明を与える道を歩まれ、中山伊知朗門下の関教授は現代経済学批判の急先鋒となった。血気盛んな若者には非常に刺激的な知的環境だった。同じく中山伊知朗門下の倉林義正教授からは、ストーン等が開発した国民経済計算体系の講義を受けた。それが契機となり、後に倉林教授の一言で、ハンガリーに留学するという運命を迎った。また、都留重人教授の薫陶を受ける機会はなかったが、学長を務められていた教授と交渉の席に就いたこともあった。この頃の一橋大学は実に多彩な教授陣を抱えていた。このような環境で学ぶ大学院時代に、出版されて間もないコルナイの『反均衡』（反均衡の経済学）の存在を知った。当時、大学院の仲間でコルナイ・リプターク・モデルを研究していた久保庭真彰氏（一橋大学経済研究所教授）がこの著書を翻訳しようと持ちかけたのが、コルナイの著作との最初の出会いだった。もっとも、それから間もなくして、岩城博・淳子夫妻による優れた翻訳が出版された。

本書のコルナイの自己研鑽時代を読むと、我々と同じような学習プロセスを踏んできたことが分かり、暫し、大学院時代が懐かしく思い出された。

コルナイとの個人的な出会いは、1982年春のブダペストで実現した。法政大学社会学部創設35周年記念行事への招聘を打診した。1983年1月のコルナイ訪日を契機に、著者の均衡理論批判と「不足の経済学」にかんする論文の翻訳出版を始めた。これらの著作は社会主義経済分析に新たな理論パラダイムを与えるものとして、我が国の学界に大きなインパクトを与えた。多くの国でそうであったように、1980年代における社会主義経済研究分野におけるコルナイの著作の引用頻度は、我が国でもトップだったと推定できる。

一つだけ、釈明しなければならないことがある。1980年代から始めた日本の学界にたいする訳者のコルナイ理論の紹介は、初めに記したインタビュー記事が最後になった。以後、本書の翻訳に至る15年間、つまり1990年代を通して今日に至るまで、訳者はこの間に記されたコルナイの著作を紹介してこなかった。訳者が大学の職場を離れたこともあるが、それが主たる理由ではない。率直に言えば、1990年代、もっと厳密に言えば1989年に出

版された『感情的ピラ』以降の著者の経済政策提案やその姿勢に賛同できなかったからである。本書の当該諸章の訳業の中で、改めてそのことを強く感じざるを得なかった。しかし、ここはそれを論じる場ではない。拙著『体制転換の経済学』（新世社、1994年）で少しだけそのことについて触れたが、コルナイの政策提言の問題については別の機会に詳しく論じたい。以下に、手短かに、コルナイの政策提言の紹介を止めた訳者の個人的な思いを記しておきたい。

コルナイはあくまで理論家である。訳者は理論家としてのコルナイを高く評価するが、政策家としてのコルナイに魅力を感じない。しかし、そのことは理論家としての価値を何ら低めるものではない。本書を読み進めながら、理論と政策、理論家と政策家、学者と政治家・活動家との間に存在する深い溝を、改めて感じざるを得なかった。コルナイが自らを理論家として禁欲的に務めたことを正しく思うし、1990年代に政策提言に踏み切った決断も理解できる。しかし、訳者個人は1990年代のコルナイにもっと別のことを期待していた。

どの世界にも万能選手などいない。医学の世界でも、解剖学の権威が、外科手術や内科手術をすべてこなすことなどあり得ない。手術ができないから、解剖学者としての権威が問われるというものではない。社会の解剖学者としてのコルナイが、具体的な政策提言ができなくても誰も責めないだろう。理論家が政治家になれなくても誰も責めない。コルナイ自身も繰り返し指摘しているように、政策家あるいは政治家には別の能力が必要だからだ。政策家にも社会的活動家に近い能力が必要とされる。

それにしても、コルナイはすべてに気配りが効いている。体制転換の過渡期の理論分析は、若い世代に任せると言い切っている。これだけの政策提言に努めた後に、こう言える理論家は少ないだろう。体制転換の問題を扱っている研究者は、このコルナイの言葉を真剣に受け止めるべきだろう。コルナイの過渡期分析を凌駕することが期待されている。

コルナイの主要な著作はみな大部である。最初の大著『反均衡』は日本経済新聞社から全訳出版された。しかし、次の大著『不足』の全訳が日本で出版できる状況にはなかった。日本における学術出版の状況は、社会が豊かになるにつれて難しくなっている。これほど皮肉な現象はない。『不足』にかかわる論考を何冊かに分けてまとめ上げることでしか、コルナイの著作を発刊することができなかった。さらに、集大成された大著『社会主義システム』の翻訳は、社会主義体制が崩壊したという事実だけで、もう出版が難しくなった。日本の学術出版の底の浅さを思い知らされる。この面では、アメリカの懐の方が比べものにならないほど深い。日本はまだ学問を育てるほどの余裕を持たないのだろうか。

それを考えれば、今回の自伝の出版はきわめて異例なことある。経済学者の自伝が売れる時代でないことは自明のことだ。しかし、コルナイという希代の学者の自伝であれば、いかなる代価を払っても、それを紹介する価値がある。その見識を示していただいた日本

評論社、就中、編集部の斎藤博氏の熱意によって本書の刊行が実現した。斎藤氏の熱意と見識がなければこの出版は実現しなかったことを記して、氏に感謝の意を表したい。これによって、「コロナ自伝」の最初の外国語訳出版が実現することになった。本書の訳業が終了した時点では、まだ英語版出版の契約は完了していない。

最後に、一言。翻訳の過程で多くの友人に訳文の素読を依頼した。他人の原稿に眼を通すのは容易い仕事とは言えないが、何人かの専門家には原稿を最後まで読んでもらった。佐藤経明氏（横浜市立大学名誉教授）からは各章ごとに感想をもらい、詳細な校正提案もいただいた。教授はコロナと同年代であり、1960年代、1970年代にハンガリーを往来され、本書で登場する経済学者たちとも面識がある。私が知るハンガリーは1970年代末からだから、二人合わせると本書のかなりの期間をカバーすることになる。現在、スウェーデンに留学中で、大学院時代の仲間である浅利一郎氏（静岡大学教授）にも校正をお願いした。久保庭真彰氏、吉井昌彦氏（神戸大学教授）、田中宏氏（立命館大学教授）からは訳文への貴重な助言をいただいた。さらに、富山栄子氏（新潟大学講師）からも意味不明瞭な箇所指摘をいただいた。これらの友人たちの助力によって、多数のケアレスミスが除去された。それでもなお、訳者の思い込みによる誤訳が残されているだろう。ひとまず、ここまで訳文完成に協力していただいた友人諸兄に感謝の意を表し、筆を擱きたい。

2005年9月 ブダペストにて

盛田 常夫